様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 13 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2008
課題番号：18592392
研究課題名（和文）　配偶者と死別した人が体験した「悲哀の仕事」の構成要素と構造

研究課題名（英文）　The components of “Mourning work” of the bereaved family

研究代表者
吉谷　優子（YOSHITANI　YUKO）
日本赤十字北海道看護大学・看護学部・講師
研究者番号：80294106

研究成果の概要：先行研究の検討とプレテストをもとに 2006 年度に作成した、遺族へのインタビューガイドを用いて、2007 度・2008 年度に対象者にインタビューを実施した。
2006 年度から 2008 年度の 3 年間に 14 名の対象者からのデータが得られた。インタビューの結果を質的に分析し、
1. 配偶者の死について１７のメインカテゴリーが抽出された。
2. また、配偶者の死によって『変化するもの』として 6 項目が導かれ、
3. 悲哀の過程は、5 つの時期に分類された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,700,000	0	1,700,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	480,000	3,780,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：(1)死別　(2)死　(3)悲哀の仕事　(4)家族　(5)半構成的面接　(6)遺族

１．研究開始当初の背景

死期が予測され「予期的悲嘆」の過程が経られるようながんによる死別の場合でも、死別に至るまでの家族のケアに関する研究は少ない。援助事例の報告はあるが、援助方法の体系化には至っていない。

また、がん死別後の遺族への援助に関する文献は、体系化されたものが提唱されている。しかし、看護専門職が援助する方法の体系とはいえない。死別後は、がん患者は死去した後なので看護の対象にはならない上に、まだ病気ではない遺族のケアには診療報酬もないし、予防ケアとしてもまだ確立していない。多くの高齢者が遺族になる可能性が高いことや、相当多くの遺族が健康障害に至ることからも、高齢化を目前とした日本では、予防ケアの一翼として、遺族の援助の体系化･確立が急務であろう。

こういった状況から、今回はまず、①死別を体験した人の健康状態にかかわらず、どういった体験をしているのかを記述し、明らかにしたい。そして、②そこから導かれる、死

別体験前後の人への、死別体験後の回復や健康の維持につながるような「予期的悲嘆」の過程を経ることが出来るような援助方法を提示したい。また③配偶者との死別を体験した家族のケアは特に重視されていることから、次のような研究目的とした。

２．研究の目的
(1)配偶者と死別した人の「悲哀の仕事」での体験を記述する
(2)「悲哀の仕事」体験の、構成要素と構造を明らかにする
(3)抽出した構成要素と構造から、配偶者との死別を体験する人、及び、体験した人への援助方法を提示する

３．研究の方法
先行研究の提示する
(1)ターミナル期の人の家族への援助事例
(2)病気での死別後の家族への援助事例
から、体験の実際、援助の必要性･方向性･要点などを整理する。
「悲哀」に関する理論･研究から、病気による死別を体験した遺族の体験の過程を、「死別前」「死別後」に分けて整理する。
それらから、遺族へのインタビューガイドを作成する
プレテストを実施する。
インタビューガイドの改善をする。
遺族へのインタビューを実施する。
インタビューから得られたデータを分析する。
体験の構成要素を抽出する。
構成要素からなる、体験の構造を分析する。

４．研究成果
先行研究の検討とプレテストをもとに2006年度に作成した、遺族へのインタビューガイドを用いて、2007 度・2008 年度に対象者にインタビューを実施した。
2006年度から2008年度の3年間に14名の対象者からのデータが得られた。インタビューの結果を質的に分析した。分析・発表の済んだ事例を紹介する。
(1)【事例紹介】
夫はX－20年からX－10年頃からB型肝炎、X－11年から肝細胞がん、死亡と同年に喉頭がん、肝細胞がん骨転移があり、透視下を中心とした化学療法や塞栓術を中心に、インターフェロン、姑息療法を行い、X年に死亡した。死別時、夫は60歳代、妻は50歳代後半であり、夫婦二人暮らしで近隣に独立した息子が二人いた。夫死亡の4年前に出生時より身体知的障がいのあった娘を、援助中の事故で亡くした。
【結果】
妻(遺族) の語った内容から「告知に関する夫と妻の気持ち」、対人関係に関することとして「人の支え」、「人との付き合い」､「医療関係者の配慮」の3つが、さらに、「妻(遺族)の気持ちや健康状態」、「子の死への償いの気持ち」、「夫(患者)の最末期の生きる意欲」、「最末期の夫(患者)の苦痛」、「治療とともに大切なこと」の9項目が導かれた。
悲哀の過程は、「告知前・後の治療と生活の両立」、「夫(故人) 退職後の姑息治療と転移の発覚」、「最末期の夫(故人)の苦痛」、「死別後の妻(遺族)の躁状態」、「人の支えを受けての妻(遺族)の仕事の再開」の5つの時期に分類された。
肝細胞がんとわかってから長年、治療と生活を両立してきたことから、「治療とともに大切なこと」が導かれたのがこの事例の特徴であった。
① 「治療とともに大切なこと」の概要
「がん」とわかる何年も前からB型肝炎であると夫婦ともに知っていたため、がん告知を受けたとき夫婦とも、治療について知識を得ようとする行動をとった。妻の強い希望で「余命の期間」は、医療関係者から夫（故人）に伝えなかった。しかし妻から見て夫は、症状の明らかな変化ではっきり余命を悟り、退職した後は身辺の整理をしていたように見え、妻も夫の身辺整理のための一人の時間を尊重した。夫(故人) が教育職であったこともあり、教え子や夫（故人）の治療にかかわった医療関係者の成長を夫婦で喜び、死別後も妻は夫の生前かかわった人の成長を喜んでいた。
② 娘との死別と対比して
夫の死別後も障がいのある娘とともに、他の障がい者を支えながら生きようという妻の「見通し」が、娘の事故死により実現不可能となり、「娘との死別のほうがずっとつらい」といった内容を語ったことが、この事例の特徴であった。

③ 配偶者の死について｢時間軸｣･｢夫婦の関係｣･｢仕事をもつ｣･｢感謝｣･｢友達と周囲のサポート｣･｢子どものサポート｣･｢配偶者(遺族)の思い｣･｢故人の希望｣･｢配偶者(遺族)の非現実的な故人への希望｣･｢配偶者(遺族)の故人に対する期待｣･｢配偶者(遺族)が自ら行動できること｣･｢一人ではできないこと｣･｢条件つきでできること｣･｢配偶者(遺族)としてできること｣･｢身体の変化｣･｢生活の変化｣･｢生きる意味｣のメインカテゴリーが抽出された。
また、配偶者の死によって『変化するもの』として、「つきあいの範囲」、「目に

見えないものの価値」、「時間の使い方」、「死後一年間の睡眠状況」、「死後一年間の飲酒量・運動量・食事摂取量・体重」、「身体機能」という6項目が導かれた。

(2)【事例紹介】

妻は、乳がんの頸部リンパ節、肺、骨、脳転移があり、化学療法、薬物療法、放射線療法を行うが、治療効果がなく、病名診断後約2年半で死亡する。死亡時、妻・夫とも40歳代、フリーターの長女と大学生の次女の4人暮らしで、最期の場所は、関西地区の緩和ケア病棟であった。

【対象】

8年前に緩和ケア病棟で妻を看取った50代の夫1名。

【研究方法】

質的記述的研究による事例研究。面接法によりデータを収集し、内容分析的手法により、データを分析した。

【結果】

妻の死によって、『変化するもの』として、「つきあいの範囲」、「目に見えないものの価値」、「時間の使い方」、「死後一年間の睡眠状況」、「死後一年間の飲酒量・運動量・食事摂取量・体重」、「身体機能」という6項目が導かれた。悲哀の過程は、「妻の入院中」、「妻の病気を聞いた時」、「セデェーションを開始した時」、「死後一年間」、「死後一年間から現在までの時期」という5つの時期に分類された。「妻の病気を聞いた時」は、ショックとショックの持続があり、「妻の入院中」は、〈緊張〉と〈難しさ〉を体験し、死亡前に「セデェーションを開始した時」は、〈寂しさ〉、〈後悔〉、〈意味のなさ〉、〈普通ではない状況〉という感情が含まれていた。さらに「妻の死亡後一年間」は、〈落ち着きがない〉、〈きつい〉、〈無関心〉、〈困惑〉、〈無気力〉、〈意欲低下〉、〈緊張〉、〈神経の高ぶり〉を体験し、「死後一年間から現在まで」では、〈一人ではいたくない気持ち〉が持続していた。一方では、死後「妻の存在」を思い出すことで悲哀を経験しながら、妻に「感謝」し、周囲の方の「支え」を受けて、自分なりの「原動力」を元に、「前向き」に「努力」や「工夫」をして生きてきたようすが明確になった。

【考察】

本事例から導き出された悲哀の5つの時期の中では、妻の死後一年以内に多様な否定的な感情の様相を示していたと同時に、睡眠状況の変化は妻の死後から現在まで続いていた。よって、感情の様相は、妻の死後1年以内に強く見られるが、その後は「孤独」を感じながらも、回復に向かっていたと言える。しかし、身体、特に睡眠の質は、妻の死後から8年経過している現在までも影響していた。以下に、特に妻の死後一年間の感情に焦点を当てて考察する。

妻の死後一年間は無気力な状態が続き、自分の中に開いた妻の「穴」の存在を知り、その穴がだんだん大きくなっていくのを日々感じていた。心の中で妻の存在を感じながら、今まで妻が行っていた家事を自分が替わって行い、少しずつ自分でそれをアレンジしていたという体験をしていた。妻の死後一年間の悲哀過程の構成要素は、〈落ち着きがない〉、〈きつい〉、〈無関心〉、〈困惑〉、〈無気力〉、〈意欲低下〉、〈緊張〉、〈神経の高ぶり〉であり、妻の死亡によっておこった否定的な感情であった。この時期に看護師の介入は、このような感情は悲哀の過程では正常であり、その正常な自分の感情を人に言ったり、あるいは言わないことで対処してよいことを伝えることができると考える。このような関わりをすることによって、異常な反応を予防できるのではないかと考える。また、「日常」を夫自身で取り戻せるように、生活や夫の健康について助言でき、さらに、早い時期に自分の身体に関心を寄せることができるような働きかけが必要ではないかと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　5件）

① 沼田　靖子・本間　仁子・吉谷　優子、配偶者と死別した遺族に関する研究－遺族の努力に焦点を当てて－、第23回日本がん看護学会　学術集会、2009年2月7日、那覇市

② 吉谷　優子・本間　仁子・沼田　靖子、配偶者と死別した人が体験した「悲哀の仕事」の構成要素と構造に関する研究－長年共に治療と生活の両立に取り組んだ夫と死別した妻の1事例－、第32回日本死の臨床研究会年次大会、2008年10月4日、札幌市

③ 本間　仁子・吉谷　優子・沼田　靖子、遺族の『悲哀の仕事』の構成要素に関する研究～全面的に信頼していた夫と死別した妻の一事例を通して～、第31回日本死の臨床研究会年次大会、2007年11月11日、熊本県熊本市

④ Yuko Yoshitani, Yoshiko Honma, Yasuko Numata, Study for the components of

“Mourning work” of the bereaved family ~On case of a wife who lost her fully trustworthy husband by death~, The Asia Pacific Hospice Conference, Sep. 27th, 2007, Philippine Manila

⑤ 沼田　靖子・本間　仁子・吉谷　優子、遺族の『悲哀の仕事』の構成要素に関する研究―ホスピスで妻を看取った夫の一事例を通して―、第 15 回ホスピス・在宅ケア研究会、2007 年 7 月 1 日、岐阜県高山市

６．研究組織

(1)研究代表者

吉谷　優子(YOSHITANI　YUKO)

日本赤十字北海道看護大学・看護学部・講師

研究所番号:80294106

(2)研究分担者

本間　仁子(HONMA　YOSHIKO)

日本赤十字北海道看護大学・看護学部・助手

研究者番号：90405704

(3)連携研究者

【研究協力者】

沼田　靖子(NUMATA　YASUKO)

兵庫県立大学・看護学部・大学院博士後期課程在学

研究者番号：20326599